

# 週刊てんのうじ①

2022.8.2 施設長 徳畑等

これから1週間に1回のペースで、「週刊てんのうじ」というお便りを発刊します。ここでは、私たちが法人の理念として掲げている考え方や手立てや方法（メソッド）、また私たち天王寺保育所の職員集団として目指していきたいことなどを、メッセージとして保護者の皆様にお伝えしていけたらと思います。少しでも私たちが考えている保育観やこども観、活動やかかわり方の意図などをご理解いただき共有していただければと考えております。

## 『プール遊び』

こどもは本来「水」が大好きです。それはお母さんのお腹の中にいる時、羊水の中で育ってきたことも関係しており、水は人間にとって生きていくための源泉と言っても過言ではありません。

とはいうものの、「水」というだけで顔にかかるのがイヤだったり、水しぶきが苦手、潜るなんてもつてのほか、といったこども（大人も）もいます。幼児期に大切なことは、本来、好きな（はずの）切っても切り離せない「水」に対して、苦手意識や苦い経験（トラウマ）を植え付けないようにすることです。逆に言えば、水の面白さ、水にしかない特性を十分に味わいながら「水に慣れる＝水と仲良しになる」ことです。

そのために、プール遊びの中では、3つの柱があります。

1つ目は「集団遊び」です。これはプールの中をグルグル回転して水の流れを作り「せんたっきごっこ」や、半分に分かれて2人で1人の子を手を持って反対側まで引っ張っていく「レスキューごっこ」、ロープや先生？を使って「綱引き大会」など、一定のルールや設定のもと、クラスのみんなで活動する時間です。直接的に水に慣れ親しむ（無理をさせて強要するのではなく）ことよりも、そのルールや設定によって「自然と水しぶきが顔にかかったり」「子どもの方から自らホースから出てくる水に近づいたり」「トンネルを潜ろうとしたら自然と水面に顔が近づいたり」というように、一定の繰り返しの中で無意識のうちに水に慣れていく、という意図があります。

2つ目は「泳ぎに向けて」です。これは4歳以上が主になってきますが、子どもには「できないことができるようになりたい」欲求があるのも事実です。プールの端（スタート）から端（ゴール）までを2人ずつ（ワニさん、バタ足、潜るなど）で一直線に移動します。大切なことは、それが一人ひとり「自分の課題」になっているかどうかポイントです。ある子にとっては「顔を水に近づけるのが精一杯」の子もいれば、「潜って泳げるねん」という子もいて、それぞれの自己課題に合わせて取り組んでいくことがポイントです。

3つ目が「自由遊び」です。その名の通り、プールの中でペットボトル、おもちゃ、フープ、浮き輪などで、好きな遊びを好きな友達（先生とも）と楽しみます。「泳ぎに向けて」の時間とこの「自由遊び」は相補的に大切で、「せんせいみてみて！」と言ってアピールする姿が「潜れる子」であっても手で水をすくって一生懸命顔に近づけようと（顔つけ）する子の姿も「すごーい！」「やるじゃーん！」と評価することが大切です。

このような3つのタイム（柱）をバランスよく構成し、子どもたちの「水慣れ」に貢献できたらと思います。